平成２２年度研究成果報告書≪教育課程≫

ふりがな	まつやましりつゆづきしようがっこう
学校名	松山市立湯築小学校

校 長 名： 桐 野 徳 子

所 在 地： 愛媛県松山市道後北代10番41号

電話番号： 089-925-5588

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究

研究対象教科等	生活

《研究主題》

ともに学び合いながら豊かに表現し，いのちを輝かす子どもの育成

―「活動や体験」と「気付き」の質を高める工夫 ―

【研究の要点】

1 主題設定の理由

生活科における「気付き」は，子どもが自分の思いや願いをもってこだわって活動する中で生まれる。また，充実した「活動や体験」は「気付き」の質を高めることにつながる。そこで，具体的な活動や体験を通して，学ぶことの楽しさを味わい，自分自身への気付きを深めることができるような学びを保障したいと考えた。

2 研究の重点と取組の概要

① 学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえた年間指導計画・単元計画の作成

年間指導計画の見直しに当たっては，活動時期と配当時間数を考え，他教科とも関連させながらゆとりある指導計画を立てることを心掛けた。また，年間を通しての子どもの意識の流れを捉えながら継続した学びを保障していくことを重視した。次に単元ごとの学習内容を確認し，内容の構成要素と階層性を踏まえ，複数の内容を組み合わせて単元を構成した。

② 気付きの質を高める学習活動の充実

気付きの質を高めるためには，豊かな活動や体験を充実させることが最も重要である。子どもの活動や体験と思考・表現というものは表裏一体であり，豊かな活動や体験は子どもの思考・表現を深める。特に，本校においては対象とのかかわりだけでなく，そこでの他の人たちとの伝え合う活動を充実させることが，より気付きの質を高めることにつながると考え試行した。

③ 伝え合い交流する活動の充実

伝え合う活動を楽しくするために2年生の「まちたんけん」では，探検直後に，その様子や気付きを伝え合う活動を行った。一対一で伝え合う場をつくることで，相手との距離が縮まり、安心感が生まれるとともに，言葉と感情を交えたコミュニケーションを行うことができた。デジタルカメラを持って町探検を行い，写真をもとに説明や質問，意見，感想などを双方向にやり取りする「デジカメトーク」も行った。

④ 継続した飼育・栽培活動の充実

年間の見通しをもちながら継続的な飼育・栽培活動が求められている。長期にわたる飼育・栽培活動の過程では，子どもの感性が揺さぶられるような場面も数多く生まれてくることから，教師がそのタイミングを逃さずに取り上げていくことを心掛けた。

⑤ 子どもの思考・表現を見取り，支援に生かす評価の在り方

生活科においては，具体的な活動や体験の過程を重視することから，小単元ごとに学習過程における関心・意欲・態度，思考・表現，気付き等の見取りの視点を設定し，子ども一人一人のよさを的確に見取り支援に生かしていこうと考えた。

3 成果と課題

○ 子どもの思いや願いと，単元における学習対象，学習活動，単元と単元の組み合わせ等のバランスを考えた年間指導計画は，継続した学びを保障し，豊かな学びにつながった。

○ 豊かな活動や体験を通しての一人一人の学びや気付きは，子どもの心情を豊かにし，自ら積極的に対象に関わろうとする子どもが育った。

○ 豊かな活動や体験の繰り返しや，そこでの他の人との伝え合う活動は，子どもの思考・表現を深め，気付きの質を高めることにつながった。

○ 継続的な飼育・栽培活動は，生命あるものを大切にしようとする心を育み，親しみをもって関わることにつながった。

○ 「ともに学び合いながら豊かに表現する子どもの育成」に全校体制で取り組むことで，子どもの発達観を共有し，育ちのつながりを意識した取組ができた。

○ 内容(8)においては，「伝え合うことの楽しさ」や「心のつながりが豊かになる楽しさ」が実感として分かるよう単元において伝え合い交流する活動の充実を図ってきた。今後は内容(8)を核とした単元づくりの可能性について探りたい。

○ 見取りの視点をもとに妥当性・信頼性のある評価についてさらに研究し，支援に生かしていきたい。

Ⅰ　研究指定校の概要

1　学校・地域の特色及び実態

校区には日本最古の道後温泉をはじめ，様々な句碑や社寺などを有しており，歴史・文化の薫り高い地域である。校名「湯築」は，中世の時代にこの地に栄えた湯築城からきたもので，昭和39年に道後小から分離して今年で47年目になる。松山市では『坂の上の雲』を軸とした21世紀のまちづくりを進めており，本校区は道後温泉サブセンターゾーンに位置付けられている。

校訓は「あたたかく，あざやかに，たくましく」であり，その気風を養うべく創意に満ちた教育活動を進めている。また，特色ある学校づくりの柱として「いのち」に学ぶ教育を推進し，いのちをきらきら輝かす子どもの育成に取り組んできた。児童スローガンの「夢めざし いのち輝かせ」は校舎にも掲げている。この「いのち」とは，①生命体としてのいのち，②かけがえのない一人一人の個性としてのいのち，③地域の自然やふるさと湯築の文化等，自分たちを取り巻きつながっているものとしてのいのち，と捉えている。つまり，自分の「いのち」（個性）と向き合い，夢をもってよりよく，より自分らしく生きようとする姿を求めているのである。

子どもの実態としては，飼育・栽培活動などの自然事象に接する機会は十分ではない。また，気付きの自覚が十分ではなく，思考と表現の一体化という低学年の特質を十分生かしきれていない。

2　学校の概要

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計
学級数	3	4	3	3	3	3	1	20
児童数	94	106	85	92	88	90	1	556

教員数　29　名

Ⅱ　研究の内容及び成果等

1　研究主題等

(1) 研究主題

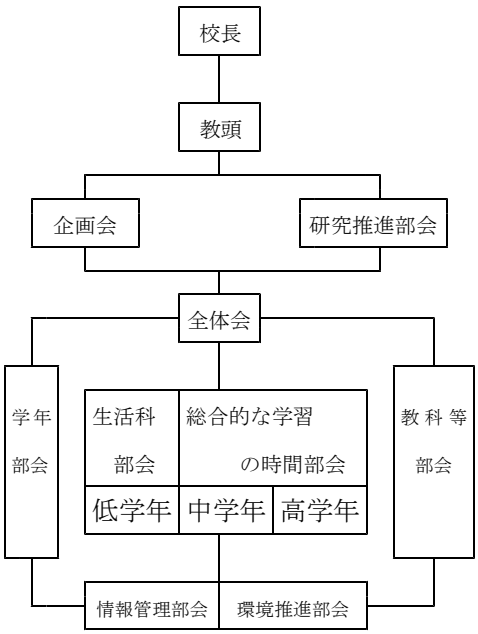
ともに学び合いながら豊かに表現し，
いのちを輝かす子どもの育成
―「活動や体験」と「気付き」の質を高める工夫　―

(2) 研究主題設定の理由

本校は，「ともに学び合いながら豊かに表現し，いのちを輝かす子どもの育成」を研究主題として過年度にわたり取り組んでいる。「個の学び」は他者との関わりの中で「学び合い」に発展していく。そして，「学び合い」を通して新たな課題意識が芽生えたり，新たな考えに結び付いたりするなど，個の学びが深まってくる。さらに，それは自分自身の発見，他者理解につながっていくと考え，「ともに学び合う」ということを大切にしてきた。「豊かに表現する」とは，子どもたち一人一人が自分らしさを発揮して学習内容を主体的に自分の中に取り込み，今もっている資質や能力を駆使して，新たな資質や能力へと高めていく過程そのものであると捉えている。つまり，子どもが思考・表現することを総じて「豊かに表現する」としている。そこで，先に述べたような「いのち」に学ぶ教育を推進し，「いのちを輝かす子ども」を育成したい，つまり「生きる力」を育みたいと考えた。

次に「活動や体験」と「気付き」の質を高める工夫についてである。生活科における気付きは，子どもが自分の思いや願いをもってこだわって活動する中で生まれる。充実した活動や体験は気付きの質を高めることにつながる。そこで，具体的な活動や体験を通して，学ぶことの楽しさを味わい，自分自身への気付きを深めることができるような学びを保障したいと考えた。

(3) 取組体制



(4) ２年間の主な取組

平成21年度	○ 研究推進計画の提案・研究組織の決定 ○ 実態調査・年間指導計画の見直し ○ 新学習指導要領解説についての共通理解 ○ 理論研究（生活科委員会との協力） ○ 授業研究（１年）（２年） ○ 研究の成果と課題の明確化 ○ 研究協議会での中間まとめ報告 ○ 授業研究（２年） ○ 研究のまとめと次年度の見通し
平成22年度	○ 研究推進計画の提案・研究組織の見直し ○ 研究内容の共通理解 ○ 授業研究　（１年）（２年） ○ 研究集録・学習指導案作成 ○ 授業研究　（１年）（２年） ○ 研究発表会開催・研究成果発表（11月26日） 授業研究（全学年） ○ 研究の成果と課題の明確化 ○ 研究協議会での報告・研究のまとめ

２　研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究の重点

① 学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえた年間指導計画・単元計画の作成

② 気付きの質を高める学習活動の充実

③ 伝え合い交流する活動の充実

④ 継続した飼育・栽培活動の充実

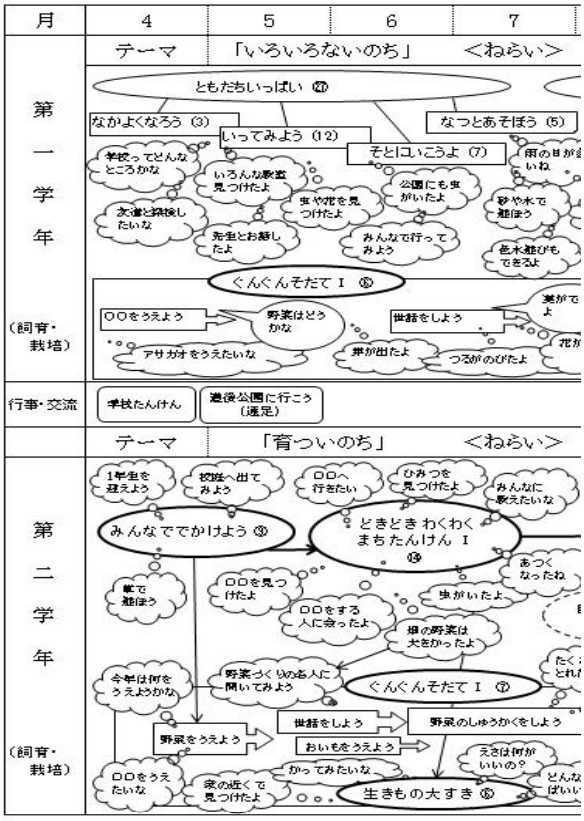
⑤ 子どもの思考・表現を見取り，支援に生かす評価の在り方

(2) 具体的な取組

① 学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえた年間指導計画・単元計画の作成

まず，改訂の趣旨を踏まえ，年間指導計画の見直しを行った。見直しに当たっては，活動時期と配当時間数を考え，他教科とも関連させながらゆとりある指導計画を立てることを心掛けた。また，年間を通しての子どもの意識の流れを捉えながら継続した学びを保障していくことを重視した。そして，１・２年生間や幼児などとの交流に関わる活動や行事を取り上げて表示するようにした。（図１）

（図１）　年間指導計画



次に単元ごとの学習内容を確認し，内容の構成要素と階層性を踏まえ，複数の内容を組み合わせて単元を構成した。特に，ここで配慮したことは，

取扱う内容のバランスを検討し，２年間を見通して単元を構成したことである。さらに，新しく加わった内容（８）の伝え合い交流する場や振り返り表現する場を設定し，言語活動を充実させたいと考えた。（図２）

（図２）内容構成表

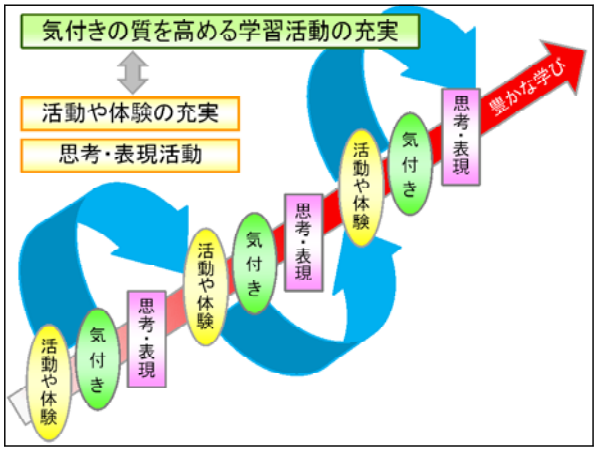
学年	内容／単元名	(1) 学校生活	(2) 家庭と生活	(3) 地域と生活	(4) 公共物・公共施設	(5) 季節と生活	(6) 自然と遊び	(7) 動植物の飼育・栽培	(8) 伝え合う活動	(9) 自分自身の成長
第一学年	ともだちいっぱい Ⅰ	◎			○		◎	○	○	
	ともだちいっぱい Ⅱ	◎		○	○	○				
	ともだちいっぱい Ⅲ					◎	○			
	ぐんぐんそだて Ⅰ					○		◎		
	みんなみんなだいすき		◎						○	○
	あきをたのしく				○	○	◎		○	
	ぐんぐんそだて Ⅱ					○	○	◎		
	ふゆとなかよく			○	○	◎			○	
	もうすぐ２年生	○							○	◎
	ぐんぐんそだて Ⅲ					○		◎		
第二学年	みんなで でかけよう	○				◎	○			
	ぐんぐんそだて Ⅰ					○		◎		
	どきどきわくわくまちたんけんⅠ	○		◎	○	○			○	
	生きもの 大すき					○		◎		
	ぐんぐんそだて Ⅱ					○		◎		
	大すきわたしの町まちたんけんⅡ	○		◎	◎	○			○	
	みんなでつくろうフェスティバル						◎		○	
	あしたへジャンプ	○	○	○						◎
	ぐんぐんそだて Ⅲ					○		◎		

② 気付きの質を高める学習活動の充実

生活科の課題として，学習活動が体験だけで終わっていることや，活動や体験を通して得られた気付きを質的に高める指導が十分に行われていないことが指摘されている。また，気付きの質を高めるためには，例えば，見付ける，比べる，たとえるなどの多様な学習活動の充実に配慮することが求められている。こうした方向を受け，昨年度は，学習過程において試行錯誤や繰り返す活動の場，振り返る場，時間の確保，環境設定を工夫したり，子どもの学びの過程を見取り，支援に生かしたりすることで，子どもたちの活動や体験と気付きの質が少しずつ高まってきた。

また，授業実践を積み重ねることによって，気付きの質を高めるためには，豊かな活動や体験を充実させることが最も重要であると考えている。子どもの活動や体験と思考・表現というものは表裏一体であり，豊かな活動や体験は子どもの思考・表現を深める。特に，本校においては対象との関わりだけでなく，そこでの他の人たちとの伝え合う活動を充実させることが，より気付きの質を高めることにつながると考え試行している。 （図３）

（図３） 気付きの質が高まる流れ



さらに，教師が子どもの思いや願いに寄り添い，教師の願いとのバランスを考えながらどのような単元構成をしていくのかということがポイントになってくる。その中で，環境構成を工夫したり，繰り返しかかわったり，子どもの活動を見取って言葉がけをしたり，活動を振り返ったりすることを通して，対象への気付きだけでなく，関連付けられた気付きへ，自分自身への気付きへと気付きの質を高めていくことができるだろう。子ども自身の学びの過程を大切にした。

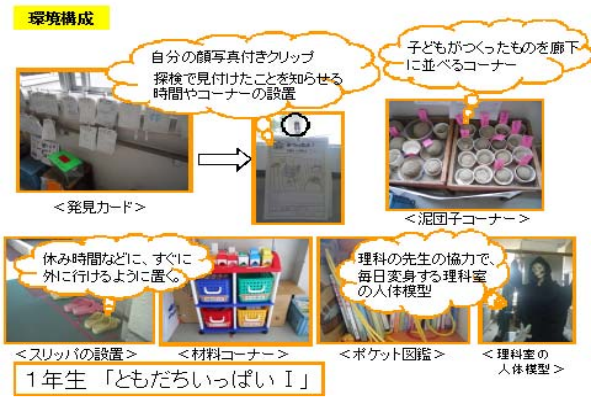
【１年生 ともだちいっぱいⅠの実践から】

入学間もない子どもにとって，小学校と出身園の違い（空間の大きさ，人の多さ，時間の流れなど）は大きく真新しいことだらけである。したがって，この時期には，学校という環境，様々な人に慣れることが一番大切であると考える。

子どもたちは，いろいろな場所に出かけ，見付けたことを話した

豊かな学びをつくり出す場の工夫（写真①）

り，発見カードにかいたりすることを楽しんだ。教師は大きな校舎地図を出し，みんなで話し合っていった（写真①）。入門期の子どもたちは，みんなで集まって話すことで，一体感や所属感を感じ，見付けたことやお気に入りの場所を共有することができた。



環境構成の工夫（写真②）

子どもの興味や関心をしっかりとつかみ，活動が広がるきっかけとなるように就学前施設の環境構成も参考にしながら，環境を整えていくよう心がけた（写真②）。子どもたちはわくわくしながら繰り返し学校探検を楽しむことができた。

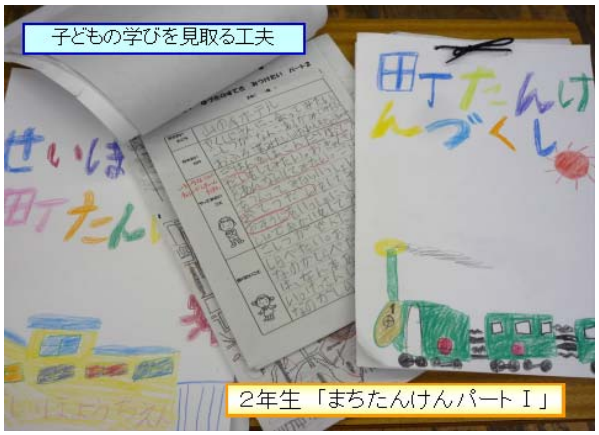
学びの見取りと支援（図４）

授業の前には，予想される子どもの活動と支援・環境構成について考えた（図４）。教師同士の共通理解ができ，活動が広がったり深まったりする様子を確認することができた。同時に，他の学年の教師にも活動の様子を知ってもらい，学校全体で活動を支えることができた。

【２年生　まちたんけんパートⅠの実践から】

「まちたんけん」で繰り返しかかわること（写真③）

２年生１学期「まちたんけん」の実践では，目的や探検形態を変えて３回の町探検を設定した。１回目は，自分が行きたいところを３か所決めて４～５人のグループに分かれて探検をした。２回目はどうしても行きたいところを１つ選んで探検をした。３回目は，関わったところへのお礼を目的に探検をした。（写真③）このように，３回の探検を設定することで，地域に親しみをもち，「今度は，私が見付けていない湯築のすてきな人に会いたい。」と，子どもの関心がさらに高まる様子を確認することができた。



まちたんけんのポートフォリオ（写真④）

子どものワークシートは，ポートフォリオにまとめた（写真④）。「まちたんけんづくし」という題名からも町たんけんに対する子どもの思いが伝わってくる。表現の出来映えのみを評価するのではなく，子どもがどのような気付きをしているのかを丁寧に見取ることを大切にしている。

③　伝え合い交流する活動の充実

今回の改訂では，活動や体験をその場限りで終わらせるのはなく，一層の充実を図る観点から，言葉だけではない様々な方法によるコミュニケーション活動を通して，体験したことや出来事を他者と伝え合い交流することを目指した「生活や出出事の交流」が新たに内容（８）として位置付けられた。これは人と関わることそのものの楽しさが分かり，身の回りの多様な人と進んで交流しようとする子どもの姿を目指している。

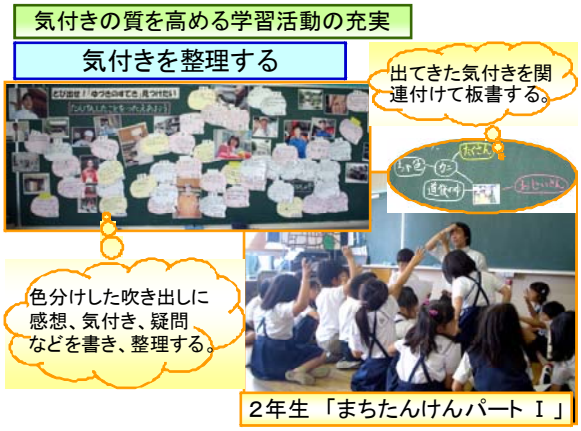
【２年生　まちたんけんパートⅠ・Ⅱの実践から】

伝え合う活動を楽しくするために２年生の「まちたんけん」では，探検直後に，その様子や気付きを伝え合う活動を行った。一対一で伝え合う場をつくることで，相手との距離が縮まり、安心感が生まれとともに，言葉と感情を交えたコミュニケーションを行うことができた。デジタルカメラを持って町探検を行い，写真をもとに説明や質問，意見，感想などを双方向にやり取りする「デジカメトーク」も行った（写真⑤）。

伝え合う活動を楽しくするために（写真⑤）

気付きを自覚させるためには「書く活動」も大切である。この実践では，交流しての感想，気付き，疑問などを色分けした吹き出しに書き，それを黒板にはって全員で見ながら，共通点や相違点などを話し合った。

また，子どもたちの気付きを自覚するために，「気付きマップ」を作成した。始めは「もの」への気付きが多く書き込まれていたが，体験を重ね，一つ一つの気付きがつながっていく中で，情意面にも目を向けるようになり，「人」や「自分」への気付きを高めることもできた。（写真⑥）



気付きを自覚させる工夫（写真⑥）

さらに「まちたんけんパートⅡ」では，１学期の活動から，「もっと人と関わりたい」「もっと新しい発見をしたい」という思いが強まり，相手や場所を決めて直接交渉したり，電話やファックスなどを使ったりして予約した。

探検当日は，インタビューやお手伝いなどの活動を通して，相手と関わる活動が保障され，温かい心の交流を図ることができた（写真⑦）。

地域の方との心の交流（写真⑦）

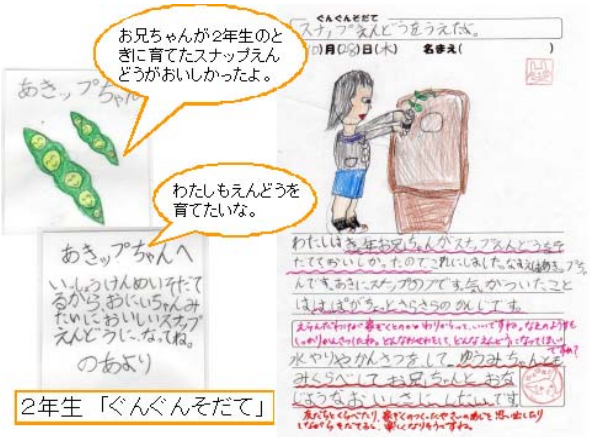
④　継続的な飼育・栽培の充実

年間の見通しをもちながら継続的な飼育・栽培活動も求められている。長期にわたる飼育・栽培活動の過程では，子どもの感性が揺さぶられるような場面も数多く生まれてくることから教師がそのタイミングを逃さずに取り上げていくことを心掛けた。

【２年生　ぐんぐんそだての実践から】

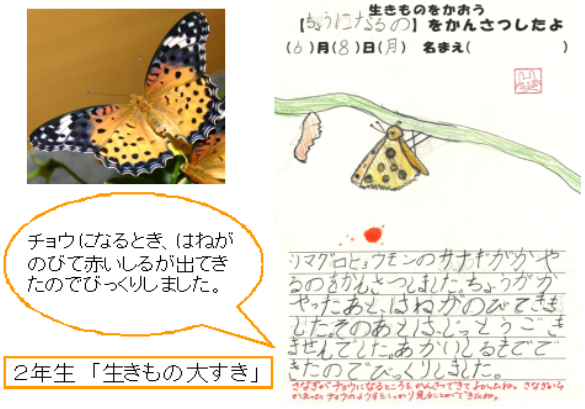
２年生が野菜を植えたとき，何の野菜を植える

かは子どもの思いや願いを大切にして決めた。子どもにとって意味があって植えた野菜の世話をする中では，「早く大きくなってねと話しかけてきたよ」「新しい芽がちょっと出たよ」と主体的に楽しく関わり，発見もたくさんあった（図５）。



スナップエンドウの栽培（図５）

【２年生　生きもの大すきの実践から】



ツマグロヒョウモンの飼育・観察（写真⑧ 図６）

１学期には，チョウやカイコ，カブトムシなどの飼育や観察を行った。ツマグロヒョウモンが，教室にもってきたプランターから，いつのまにか移動してさなぎになる場所を見付けた。身近なところで継続して飼育すると，こうした場面にも出会うことができる。さらに，このような生命の誕生に出会えたことで，自然の不思議さを感じたり，驚いたりしていることがよく分かった（写真⑧　図６）。

ぼくのザリガニ（写真⑨）

生き物と関わるうちに「すごくやさしい性格なんだ」と自分のザリガニの性格まで分析している子どももいる。しばらくして，ザリガニの赤ちゃんが産まれた。「かわいい」と食い入るように見つめ，新たな生命の誕生をみんなで喜んだ。

このように，毎日の学校生活の中で飼育・栽培活動を無理なく位置付けることで，生き物が自分たちと同じように成長し，生命をつないでいることに気付き，一層親しみをもって関わることにつながった（写真⑨）。

⑤　子どもの思考・表現を見取り，支援に生かす評価の在り方

生活科においては，具体的な活動や体験の過程を重視することから，評価は重要である。小単元ごとに学習過程における関心・意欲・態度，思考・表現，気付き等の視点を設定し，子ども一人一人のよさを的確に見取ることを心掛けた。図７は，単元全体の学びの過程に沿って設定した見取りの視点の例である。子どもの意識の流れや活動の広がりを予想し，学びの姿をイメージして設定し，支援に生かしていこうと考えた。

しかし，子どもがどのように思考・表現しているのかを見取ることは容易ではない。そこで，多様な子どもの発言やしぐさを教師とのやりとりを通して丁寧に見取るだけでなく，子どもの学びを

見取るためのワークシートの改善を図った。

（図７）学習活動の評価規準と見取りの視点

（図８）朱書きを２回入れたワークシート

左記は，おもちゃフェスティバルをした後の２年生のワークシートである。途中に朱書きを入れるスペースをあけ，同じワークシートでのやりとりを通して，さらに友達の工夫について気付いたことを書いている。（図８）

(3) 考察及び成果と課題

気付きの質を高めるためには，豊かな活動を保障することが大切であることを確認した。「ともだちいっぱい」でも「まちたんけん」の単元でも，子ども自らが活動を始められるように子どもの思いや願いに寄り添い，対象にじっくりと関わることのできる環境を設定したり，子どもの活動を見取って言葉がけをしたりすることを通して活動を豊かにし，自分自身への気付きを深めることができた。そのための教師の準備，学年や学年を超えての支援は大事であり，有効であった。

伝え合う活動，内容（８）についての単元開発は十分ではない。しかし，インパクトの強い体験をしたとき，伝えたいという思いが芽生え，それを伝え合う活動が子どもの思考・表現を高め，それらを結び付けるということを実践を通して確認することができた。その際，様々な形態の中でも，一対一の場が有効であり，心を開いて互いを必要とする友達との交流は重要な役割を果たした。

継続して生き物に関わる活動では，誕生や死の場面に出会い，大きな喜びや悲しみを自分のこととして体験することができた。そして，さらに生き物に夢中になって自分なりのこだわりをもち，自信をもって関わろうとする子どもが育った。

３　研究の成果と課題

豊かな活動や体験を通しての一人一人の学びや気付きは，教師が意図した以上に深いものであり，子どもの心情を豊かにするとともに，自ら積極的に対象に関わろうとする子どもを育てる。その繰り返しや，そこでの他の人との伝え合う活動は，子どもの思考・表現を深め，気付きの質を高めることにつながった。

また，「ともに学び合いながら豊かに表現する子どもの育成」に全校体制で取り組むことで，子どもの発達観を共有し，育ちのつながりを意識した取組ができた。その結果，自分の思いを進んで伝え合い，ともに学ぼうとする子どもたちが育ってきている。

内容（８）については，これまでも何度か話し合いをもってきたが，内容（８）を核とした単元づくりの事例を示すことができなかった。子ども一人一人の思いや願い，思考・表現を大切にするという生活科の特性から，さらに，子どもを見取り単元構成をしていきたい。そのためには，見取りの視点をもとに妥当性・信頼性のある評価についてさらに研究していく必要がある。

また，今年度１年部を中心に，就学前教育との滑らかな接続を図るスタートカリキュラムを作成したところである。今後は，子どもの実態を踏まえ，実践を通してカリキュラムの改善を図りたい。

平成２２年度研究成果報告書≪教育課程≫

ふりがな 学校名	ひょうごきょういくだいがくふぞくしょうがっこう 兵庫教 育大学附属小 学 校

校 長 名：田中　雅和

所 在 地：兵庫県加東市山国2013-4

電話番号：0795-40-2216

新学習指導要領の趣旨を具体化するための 指導方法等の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	生　活

≪研究主題≫

子どもと教師の思いをつなぎ，気付きを深める生活科単元の創造

【研究の要点】

今回の研究では，単元構想における要件を整理し，生活科に不慣れな教員であっても単元構想が容易にできることを目指した。そして，その観点の妥当性を探っていく中で，単元構想のためのモデル図を作成した。

成果としては，以下の点が挙げられる。

①単元を構想する際，題材の選択や学習の流れの組み立てが重要であるが，この点において考えるべき「観点」が明確になってきた。

②学習活動において，教師が指導するポイント（具体的な手立て）が明確になり，より状況に応じた指導ができるようになった。

この結果，児童の活動への意欲は高まり，また，教師の関わりによってさらに気付きを深めることにつながった。

Ⅰ　研究指定校の概要

１　学校・地域の特色及び実態

本校は，師範学校の流れをくむ教育大学系の伝統ある附属学校とは異なり，新構想大学の附属学校として発足し，ユニークな学校づくりが行われてきた。開校と同時に，学校教育目標を「『人間として生きぬく力』を育てる」と定め，学ぶことと教えることの調和を図りながら，確かな学力を形成することを目指している。

さらに，創造的で体験的な活動（うれしのカーニバル），全校縦割りの集団表現活動（うれしのミュージカル），学年縦割り集団による課題探求活動（うれしの総合活動）を通して，豊かな心や表現力の育成に取り組んでいる。

２　学校の概要（平成２２年４月５日現在）

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計
学級数	3	3	3	3	3	3	0	18
児童数	104	98	104	102	94	74	0	576

教員数　２８名

Ⅱ　研究の内容及び成果等

１　研究主題等

(1) 研究主題

子どもと教師の思いをつなぎ，気付きを深める生活科単元の創造

(2) 研究主題設定の理由

生活科においては，内容が多岐にわたっており，「どんな題材で」「どのように学習するのか」を考えて単元構想をするときに，その過程が非常に複雑になっている現実がある。特に，生活科に慣れていない教員（さらに言えば教育実習生）にとっては，生活科の単元をつくることに難しさを感じていることが多い。

そこで，今回の研究においては，単元を構想するための要件や単元作成の流れをより明確にすることが，単元づくりの負担軽減につながると考えたのである。

(3) 取組体制

◆研究推進委員会…研究のブレーン，素案づくりをはじめとした研究を総括する部門

（校長，副校長、研究主任，生活科主任，大学教員）

◆生活科担当者部会…実務部会，研究推進委員会から提案される内容を具体化させたり，深化させたりする部門（生活科主任，１・２年担当教員）

◆カリキュラム検討委員会…研究の妥当性や小学校教育としての一般性を問い，研究の一極化を抑えたり，研究を評価したりする部門

（研究主任，大学教員，連携関係校職員，PTA 会長など外部の知も導入する）

(4) ２年間の主な取組

平成21年度	○研究主題「単元を創造するための重要観点の構築」の校内啓発と組織づくり ○計画カリキュラムの作成 ○実践カリキュラムの作成とその検討 ○カリキュラム検討委員会の発足 ○校内における生活科単元づくり（観点の書き綴り）及び実践のリフレクション ○連携関係校での啓発や実践 ○研究報告会の開催 ○修正カリキュラムの作成 ○カリキュラム検討委員会での研究の補正
平成22年度	○研究の補正，継続 ○新着任教員への啓発 ○単元構想モデル作成 ○校内における生活科単元づくり（単元構想モデル活用）及び実践のリフレクション ○教育実習生への啓発，指導案づくり（単元構想モデル活用） ○研究発表に向けて

２　研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究の重点

学習指導要領には，「目標」「内容」「時間数」が定められている。この３つの要素をもとに単元開発をしていくのであるが，題材を設定したり，学習の流れを組み立てていく過程に難しさを感じている教員も少なくない。それは，この３つの要素以外にも考えるべき要件があり，それらが複雑に関連しているからだと思われる。

そこで，単元構想の要件を設定し，学習活動を考える上で要件がどのように関連するのかを明らかにしていきながら，単元づくりが容易にできるような方法を探っていく。また，活動から生まれる子どものいろいろな気付きに対して，教師が意味付けたり価値付けたりしながら，さらに深めていくための指導へとつながると考えた。

(2) 具体的な取組

◆５つの観点の設定

単元づくりで必要な要素とは，具体的にどのようなものが考えられるであろうか。

まずは，学習指導要領にある「目標」「内容」「時間数」が挙げられる。しかし，例えば「時間数」おいて，学習指導要領に示されているのは総時間数で，実際に単元をつくる際には単元ごとの時間数や年間の単元の配置を考慮しなければならない。このように，それぞれの要素の意味や中身については，本校研究で独自の解釈を加えることにした。

また，単元づくりでこの３つの要素以外によく話題に挙がった要素として，活動をどのような形で行うのか（形態）や，教師がこの題材でどのように指導していくのか(具体的な手立て)があった。

そこで，次の５つを仮説的に「単元づくりの５つの観点」とおくことにした。

【単元づくりの5つの観点】

●**時期･時間数･･･**単元を進めるにあたって，季節や行事にあわせて必要な時間を設定したもの。

●**目標･･･**学習指導要領を基本とし，子どもの到達してほしい姿を単元にあわせて設定したもの。

●**内容･･･**目標到達のために，子どもが必要とする経験を活動として設定したもの。

●**形態･･･**個，グループ，一斉など，学習を深めていく上で最適と思われるものを状況にあわせて設定したもの。

●**具体的な手立て･･･**授業者が，子どもの学びをより価値の

高いものにするために行う手立てや工夫，留意点を記述したもの。

◆「５つの観点」の妥当性検証

単元づくりでは，「５つの観点」を書き綴っていき，それをもとに授業実践を繰り返す中でこれらの観点の妥当性を検証していった。

具体的には，観点を書き綴ったものを単元ごとに授業後に見直し，教科担当での振り返りを行ったが，その結果，次のようなことが成果として挙がってきた。

・教師が単元全体の流れを明確に意識しながら単元づくりをすることが可能になった。
・単元づくりの中で，５つの観点が相互に関連し，それぞれの観点がより詳しく具体的なものに膨らんでいくことが確認できた。

しかし，個々の観点の関連性については，教師の経験に頼る部分がまだまだ多い。つまり，単元づくりの要件は見えてきたが，そのつながりの部分については研究の余地を残した。

そこで，単元構想について，より一般性を持たせるために，構想の流れを図式化し，単元づくりの要件がどのようにつながるのかをさらに明確にしていくことを考えた。

◆単元構想モデルの作成

単元を構想するための要件がどのように関連し，そこから教師はどのように単元を組み立てていくのかを明確にするために，これまでの５つの観点による単元づくりを再度検討した。そこで話題に挙がったのは，次のとおりである。

・単元構想がまだ教師中心の目線であり，子どもの思いや実態が十分に反映されたものになっていない。
・単元をつくるもととなる「題材」の設定に明確な基準がないため，題材設定での難しさを払拭できていない。

そこで，もっと子どもの思いや実態が反映されるような方向性をもちながら，子どもの学びにあった題材を開発できるようにしたいと考えた。また，それをもとに単元を構成する際に，学習の流れが組み立てやすくなるように，要件の関連性を整理することにした。

具体的には，「単元構想モデル」（資料①「生活科：単元構想モデル」参照）を作成し，それに基づいて単元づくりを行うことと，それが一般化できるように，これまでと同様に実践を重ねながら適宜修正を加えていった。

◆単元構想モデルによる実践

今回は，第１学年の実践「いろんなかみがいっぱい」を紹介する。

単元構想モデルに基づいて，まず【構想：ステップ１】では，「子どもの思い」と「教師の思い」を以下のように整理した。

【子どもの思い】
●家庭での経験・・・新聞紙や広告，雑誌，ティッシュなど，いろいろな種類の紙に触れている。
●これまでの学習経験・・・図工の学習などで，色紙や画用紙等を使って学習している。
●興味や関心・・・自分で折り紙を持ってきており，休み時間にいろいろな形を折って楽しんでいる。また，お菓子の空き箱や牛乳パック等の廃材を使って工作をしながら遊んでいることも多い。

【教師の思い】
●教師の学ばせたいこと・・・紙にはいろいろな種類があり，用途に合わせて使い分ける意識がほしい。また，紙の大切さを知り，無駄なく使うことにも気付かせたい。
●学習指導要領・・・内容（６）「身近にあるものを使った遊びの工夫」

ここから，題材を「紙漉（かみすき）」と設定した。紙漉は，水に溶かした紙の繊維を枠に張った網ですくい取るものである。

子どもたちがいろいろな材料を用いて紙づくりを試すことができ，活動の広がりを生み出せる。また，うまくいかないところを友だち同士で考えたり，助け合ったりする関わりも誘発で

きる。さらに，作った紙の用途を自然に考えたり，紙づくりの大変さから紙の大切さに気付いたりすることも考えられる。これらのことから，紙漉を題材とすることには，子どもが学ぶ価値があると考えた。

次に【構想：ステップ２】では，ステップ１で整理された要件を当てはめていき，学習活動の流れを考えた。子どもの視点で紙漉の学習を進めた場合，「どんどん紙漉がしたい」→「いろんな材料を入れて作りたい」→「作った紙で遊んでみたい」という流れが考えられる。しかし，前述のように，「紙の種類」「紙の用途」「紙の大切さ」といった教師の意図を含みこんでいきたい。そこで，今回の学習活動は，「いろいろなかみをあつめよう（導入）－てづくりペーパーをつくろう（展開）－てづくりペーパーであそぼう（まとめ)」という流れを設定した。

最後に【計画】の段階では，【構想：ステップ２】でできた学習活動の流れに「時間数」「活動場所」「形態」「具体的な手立て」などの肉付けを行い，単元計画（資料②「学習の流れ」参照）を完成させた。

(3) 考察及び成果と課題

導入では，子どもたちが紙に興味をもち，いろいろな紙を集める中で，その種類と用途について熱心に考えることができた。展開では，紙漉に興味をもって活動に没頭し，自然を含めた身近な材料を使って「色」「形」「香り」などに拘った紙づくりができた。まとめの活動では，自分の作った紙の使い道を「工作」「教室の飾り付け」「手紙」など，紙の出来映えに合わせて用途を考えることができた。また，活動の中で出てきた子どものつぶやきや発言を，教師がつないだり，広げたり，言い換えたりしながら，気付きを深めていくことができた。

また，実践を重ねていくうちに，題材設定において重要であると思われる要件が明らかになってきた。その要件とは次のとおりである。

●困難性…課題に適度な難しさがあること。
●意外性…思ったこととは違う発見があること。
●驚異性…達成への驚きがあること。
●発展性…活動に広がりがあり，子どもたちの思考が深まる要素があること。

今回の紙漉の実践では，この４つの要素を含むことができたと考えている。今後は，どんな題材にもこれらを当てはめることができるかどうかが課題となろう。

３　研究の成果と課題

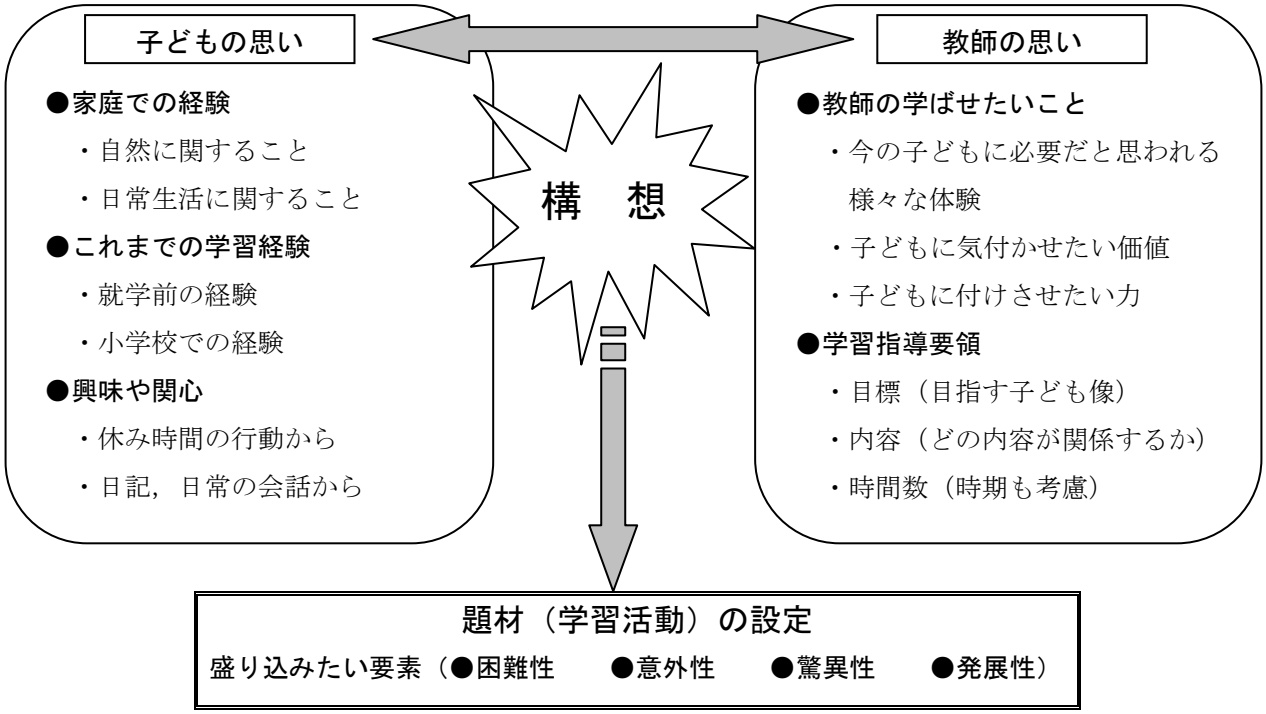
今回の研究を通して，生活科の単元づくりで難しいと感じていた「題材の設定」や「学習の流れの組み立て」について，要件を「観点」として書き綴ったり，単元構想モデルとして図式化したりしてきた。その中で，「生活科で学ばせたいこと」を教師が明確にもつことができるようになり，自信をもって子どもの学習指導にあたれるようになった。

また，本校では，大学の学部生が教育実習のために来校しており，指導計画を立てて授業を行う教壇実習がある。その時に，この単元構成モデルを活用してもらって実際に授業をしてもらうことも計画した。これまでは「生活科は他の教科と比べて単元計画が難しい」と感じていた学生も，このモデルを活用することで，「何を教えたら良いのかが分かりやすくなった」「題材選びのヒントになった」という声が聞かれ，無理なく単元づくりができることが確認できた。

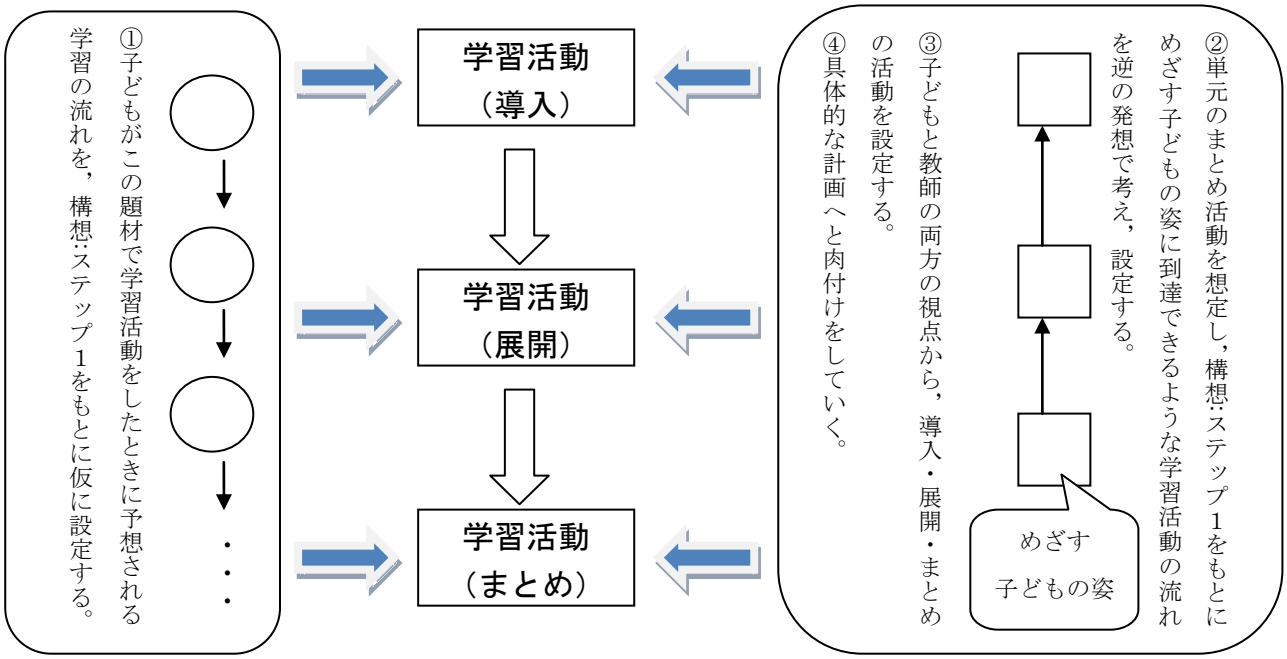
このように，一単元においての構想の流れは一定の成果を挙げることができたが，このように開発できた単元同士の整合性や系統性について，学年内だけではなく，第１学年から第２学年へとつながっていくように考えていく必要もあると思われる。今後はカリキュラム総体としての視点をもった研究へとつなげていきたい。

（資料①「生活科：単元構想モデル」）

【構想：ステップ１】子どもの思いと教師の思いをすり合わせ，題材を設定する。



【構想：ステップ２】題材をもとに，単元の流れを子どもと教師の２つの視点から考える。



【計画】目標や学習活動，教師の手立て等を，より具体的にしていく。

◆学習の流れ

内容・時間数	主な学習活動	教師の具体的な手立て	形態・活動場所
１．・・・ （□h） ２．・・・	（１）・・・・・・。 （２）・・・・・・	○・・・・・・・。 ○・・・・・・・。 ○・・・・・・・	・　（　） ・　（　） ・

単元構想：計画【資料②「学習の流れ」】

目　標

○色紙や新聞紙，ティッシュ，和紙など，いろいろな紙の見た目や手触り，においなどを感じ取る。
○自分の紙をつくることに興味をもち，自分なりの工夫をしながら楽しんで紙づくりをする。
○つくった紙をどう使うかを考え，遊びにいかしたり，手紙を書いたりする。

学習の流れ（全１２時間）

内　容 時間数	主な学習活動	具体的な手立て	形　態 （活動場所）
いろいろなかみをあつめよう（３ｈ）	◎新聞紙・広告・画用紙を使って紙てっぽう遊びを楽しみ，それぞれの紙の特徴を見つける。 ◎いろいろな紙を集め，それぞれの紙について気が付いたことを発表する。 ・色，形，大きさ ・硬さ，感触 ・匂い　など	・紙の質の違いに気付くことができるように，紙てっぽうを３種類の紙で作らせ，遊ぶ中でそれぞれを比べられるようにする。 ・紙の種類の多さを実感できるように，子どもたち自身で紙を集めさせる。 ・それぞれの紙の特徴や違いを実感を伴って気付かせていく中で，紙を自分でつくれることを知らせ，次時につなげる。	・一斉授業 （教室） ・個別活動 （各家庭，学校内外） ・一斉授業 （教室）
てづくりペーパーをつくろう（７ｈ）	◎紙漉によって自分たちで紙をつくる。 ・手順どおりにつくってみる ◎自分なりの工夫を考える。 ・色を変える ・形を変える ・紙を組み合わせる ・他の物を混ぜる （秋の葉など） ◎つくった紙の鑑賞会をする。	・紙漉による紙づくりの流れをおさえるために，牛乳パックという条件を揃えて活動をさせていく。 ・紙づくりに慣れてきたら，紙の質を変えて作れることを知らせ，自分なりの工夫が紙の質の変化に生かされたことが分かるように，いろいろな材料を使って紙づくりをさせていく。 ・自分の作品に生かせるように，他の子の作品から工夫点や良さを感じ取らせる。	・班活動 →一斉授業 （教室） ・班活動 →一斉授業 （学校内外，教室） ・一斉授業 （教室）
てづくりペーパーであそぼう（２ｈ）	◎つくった紙がどんなことに使えそうかを考える。 ・つくった紙で遊ぶ ・絵を描く ・手紙を書く ◎心のこもった手紙を書く。 ・お家の人 ・友だち ・学校〔３０周年〕	・いろいろな用途が考えられるように，これまでの経験や学習を想起させ，自分や友だちが楽しめたり，他の人に喜んでもらえたりするような方法へとつなげる。 ・他の人に自分の思いが伝わるように，たくさんつくった紙の中から手紙を書くのにふさわしいものを選ばせる。 ・本校の３０周年をお祝いするために，学校に手紙を書くことを提案する。	・一斉授業 （教室） ・個別活動 ・グループ活動 （教室，各家庭）